企画特集

1 GREEN×EXPO 2027

GREEN×EXPO 2027、いよいよ開催半年前に！！

GREEN×EXPO 協会
公益社団法人 ２０２７年国際園芸博覧会協会

はじめに

日本で開催された 6 回目の万博として 2025 年に大阪市・夢洲で開催された大阪・関西万博は、半年間の会期で約 2,900 万人の来場者を集め、大盛況のうちに閉幕しました。国内で 7 回目の万博としていよいよ開催が来年に迫るのが、神奈川県横浜市で開催される「２０２７年国際園芸博覧会（GREEN×EXPO 2027）」です。現在、開幕まで半年をきり、開催に向けた準備が、着々と進んでいます。

GREEN×EXPO 2027 は、BIE（博覧会国際事務局）認定の万博であり、かつ AIPH（国際園芸家協会）の承認として、日本では 1990 年の大阪花の万博以来 37 年ぶりに開催される最上位（A1）クラスの博覧会であり、2027 年 3 月 19 日から 9 月 26 日までの半年間、有料来場者数 1,000 万人を目標としています。

大阪・関西万博からわずか 2 年後に開催され、同一国で 2 年の間に連続して万博が開かれるのは初めてのことであり、造園業界ひいては農・園芸業界に多大なインパクトを与える国際博覧会です。ぜひともご注目いただき、多くの関係者にご来場いただくことを願っています。ここでは、直近の発表等を含む、最新の情報をご紹介いたします。

テーマ「幸せを創る明日の風景」に加え、キャッチコピーを展開中。

GREEN×EXPO 2027 におけるテーマ「幸せを創る明日の風景」は、これまでの経済的な豊かさを主体とした対比的な充足から、自然との共生やシェア、つながりがもたらす幸福感を深めていく社会を目指し、心の豊かさである「幸せ」、空間・環境・時間が織りなす「風景」、次世代や未来の「明日」を重ね合わせたものとなっています。

また、開催 1 年前を機に新たなキャッチコピーとして「地球と。咲きに行こう。」というフレーズでの PR も実施しています。これは「地球を」ではなく「地球と」人がフラットな目線でこれからの生き方を見つけられるきっかけが花や緑を起点に広がっていくことを、「咲きに行こう」という言葉に想いを込めたものとなっています。



GREEN×EXPO 2027 開催半年前記者発表会を開催

2026 年 9 月 15 日（火）、大手町三井ホールにて、「GREEN×EXPO 2027 開催半年前記者発表会」を開催しました。いよいよ半年後となった開催に向けて、高市早苗内閣総理大臣からビデオメッセージをいただくとともに、金子恭之国土交通大臣、鈴木憲和農林水産大臣、井野俊郎経済産業副大臣、平原敏英横浜市副市長、黒岩祐治神奈川県知事が GREEN×EXPO 2027 への期待とその成功へ向けた決意を述べました。

さらに GREEN×EXPO 2027 を共に盛り上げるスペシャルサポーター「QuizKnock」のふくら P さんと鶴崎修功さん、タレントの榊原郁恵さん、園芸デザイナーの三上真史さん、「囲碁将棋」の文田大介さんと根建太一さん、「NMB48」の塩月希依音さんと平山真衣さんが登場し、「192 日、いつでも満開会議」と題した特別企画に参加しました。企画では、「どの時期の満開を見に行きたいか」をテーマに、スペシャルサポーターひとりひとりがプレゼンテーションし、気象予報士の資格を持つお笑い芸人・みながわさんが加わりプレゼン内容を深掘りするクロストークが行われました。お話が進むとともに、いつ訪れても花やみどりを楽しめる GREEN×EXPO 2027 の魅力が広がり、会場は大いに盛り上がりました。また本発表会には、大阪・関西万博のミャクミャクをはじめ、モリゾー・キッコロ、花ずきんちゃんと、日本で開催された国際博覧会の公式キャラクターたちが駆けつけ、フォトセッションに参加するなど会場を盛り上げました。

【筒井会長挨拶】

GREEN×EXPO 2027 の開幕まで、いよいよ半年となりました。70 を超える国・国際機関、全都道府県、500 を超える企業・団体の参加が決定し、開催に向けた「共創」の輪が大きく広がっています。多くの皆さまのご支援により入場券販売も進み、9 月 18 日からは来場日時予約が始まります。本博覧会は「幸せを創る明日の風景」をテーマに、単に花と緑を楽しむだけの博覧会ではなく、人と自然が共生する持続可能な未来を世界へ発信します。ぜひ多くの方々にご来場いただき、その魅力を体感していただきたいと思います。引き続きご支援、ご協力をお願いいたします。



筒井会長挨拶



スペシャルサポーターと
歴代の国際博覧会の公式キャラクター

3 施設の愛称決定！！

GREEN×EXPO 2027 のテーマを発信する主要施設として重要な役割を担う「テーマ館」「園芸文化館」「屋内出展施設」の 3 つの展示施設の愛称募集を、2026 年 6 月 5 日から 6 月 26 日にかけて実施しました。最優秀作品に決定した愛称は、今後、会場マップ等で来場者に対する情報として、広く活用していきます。

審査の観点は、「誰もが親しみやすく、覚えやすいか」「本博覧会らしさやイメージが連想できるか」「展示施設の使用用途がイメージしやすいか」。3 施設延べ 3,611 件の公募から、厳選なる審査を経て 2026 年 9 月 15 日に実施した「GREEN×EXPO 2027」開催半年前記者発表会で愛称を発表しました。

テーマ館（愛称：ねっこ）
～全ての生命はつながっている。植物を中心に～

地球規模で直面する気候変動に対して、自然や緑と共に生きるすべを、植物や生物に学び、未来に活かす展示を行う施設です。建物は国産材を活用した CLT（直交集成板）を用いることで持続可能な循環を表現し、カーボンニュートラルの実現に貢献します。

植物の形には機能的な意味があるため、それに倣って植物の形態や構造等の合理性を建築に応用しました。多くの生命に支えられて成り立つ「本物の世界」のつながりを、植物という主役を通じて全身で体感していただく場をつくりだします。

［最優秀作品受賞者ハンドルネーム：ゆむ］
「全ての生命はつながっている。植物を中心に」というコンセプトから、植物の「根っこ」を連想。根っこは植物の土台・根源であり、テーマ館が植物の形態や構造の合理性を建築に応用している点からも着想を得た愛称。







園芸文化館（愛称：いろはにわ）
～日本の園芸文化を知り・感じ・未来につなぐ～

日本人特有の自然観によって育まれた、日本の伝統園芸文化を紹介する施設となります。

建物は日本独自の桔木構法（はねぎこうほう）を用いながら、既存地形に沿った雁行配置（がんこうはいち）とし、屋根を緑化して大地と接続させることにより、周辺環境と調和したデザインとしています。江戸時代から受け継がれてきた日本独自の園芸の美意識と技術を、実物や体験を通して伝えます。自然との共生や地域とのつながり、心の豊かさを改めて見つめ直し、その文化を未来へとつなぎます。

［最優秀作品受賞者ハンドルネーム：やかわ］

日本の伝統的な「いろは」の響きに、伝統園芸の「庭（にわ）」を掛け合わせた愛称。江戸時代から続く日本独自の園芸文化の歴史や美意識の「いろは（基本と奥深さ）」を、大地と調和する美しい雁行形式の建築の中で、誰もが親しみながら学べる場をイメージ。







屋内出展施設（愛称：はなめぐり）
～訪れるたびに新たな感動～

屋内出展施設では、花・緑出展者と公式参加者の屋内展示を行います。開幕から閉幕までの期間を通して国内外からの多様な花と緑で彩られた出展をお楽しみいただけます。さらに、9日間ごとに企業や団体、個人、自治体などによるさまざまな展示が入れ替わり、訪れるたびに新しい魅力に出会えます。

2020年ドバイ万博日本館、2025年大阪・関西万博ウーマンズパビリオンで使用された構造材をリユースし、GREEN×EXPO 2027が掲げる「GREENサーキュラー建築」の実現を目指します。

［最優秀作品受賞者ハンドルネーム：横浜の双子ママ］

世界中から集まる花や緑、そして季節ごとに入れ替わる展示との出会いを表現。訪れるたびに新しい景色や発見があり、「めぐる」という言葉には花の循環、人の交流、未来へのつながりという意味を込めている。



画像提供：永山祐子建築設計

企業・団体出展、国際出展について

企業・団体等による出展は、「Village出展」「テーマ営業出店」「花・緑出展」の3種類があります。

「Village出展」では、共創事業のコンセプトに賛同いただいた企業・団体による大規模出展で、12企業・団体の出展が決定しています。「テーマ営業出店」は、同じく共同事業Villageにおいて本博覧会のテーマ「幸せを創る明日の風景」の創出に資するエシカル消費や食育などをテーマとした独自の飲食や物販等、企業・団体による出店で、4企業・団体が内定しています。

「花・緑出展」は、庭園や花壇、生け花、盆栽、新品種・希少種など多種多様な花・緑の作品の出展で、花き園芸・造園関連企業・団体、学校、自治体など2026年9月15日現在で391者が内定しています。自治体については、全ての都道府県、政令市が出展予定です。

70の国・国際機関の参加を目標としたところ、2026年9月9日現在で、それを上回る74か国・5国際機関が出展を表明しています。

GREEN×EXPO 2027における機運醸成活動

開催まで半年を切る中、首都圏を中心とした鉄道会社や商業施設など多くの企業による連携の輪も広がっており、着々と開催に向けた機運醸成が整いつつあります。

公式マスコットキャラクター「トゥンクトゥンク」や公式ロゴマーク、サブグラフィックを用いたライセンス商品の開発も活発に行われており、「トゥンクトゥンク」と大阪・関西万博のキャラクター「ミャクミャク」をはじめとする様々なキャラクターとのコラボレーション商品も開発しており、人気を博しています。また、これらのライセンス商品を販売する「EXPO 2027オフィシャルストア」は、2026年9月時点で常設12店舗を展開し、ポップアップストアも全国で150店舗以上がオープンしています。ライセンス商品の人気の高まりは本博覧会の期待値の表れといえます。また、ライセンス商品はオンラインストアでも販売中ですので、店舗が遠い方はぜひオンラインショップをご利用ください。

チケット販売について

GREEN×EXPO 2027の各種入場チケットは、開幕1年前の2026年3月19日より販売を開始しました。「1日券」のほか、いつでも何度も来場できる「通期パス」や「夏パス」を、公式チケットサイトのほか、当協会が契約している旅行代理店やコンビニ、プレイガイドなどの販売事業者から購入ができます。また来場者の皆さまに安全かつ快適にお楽しみいただくために、来場日時予約制度を導入し、2026年9月18日から予約を開始しました。

詳細は、チケットインフォメーションをご利用ください。

おわりに

GREEN×EXPO 2027の会場では、出展者も含めた現場での工事も着々と進められています。一都三県で初の万博として、大阪・関西万博の盛り上がりを引き継ぎながら着実に準備を進めていくこととしており、引き続き多くの方々の参加、協力をお願いします。

GREEN×EXPO 2027 概要

- ■名　称　：２０２７年国際園芸博覧会
  International Horticultural Expo 2027, Yokohama, Japan
- ■会　場　：神奈川県横浜市
  （旧上瀬谷通信施設）
- ■開催期間：2027年3月19日～
  2027年9月26日
- ■テーマ　：幸せを創る明日の風景
- ■クラス　：最上位（A1）クラス
- ■区　域　：約100ha（内、会場区域80ha）
- ■有料来場者数：1,000万人以上
- ■主　催　：公益社団法人 ２０２７年国際園芸博覧会協会

GREEN×EXPO 2027 への CLA 出展について

加藤 修
CLA ２０２７年国際園芸博覧会特別委員会委員長

私たち CLA は、横浜・上瀬谷で開催される２０２７年国際園芸博覧会（GREEN×EXPO 2027）において、初めて花・緑出展に挑戦します。

90 年の「大阪花の万博」以降 数多くの国際園芸博覧会に携わってきた CLA

CLA は、1990 年の「大阪花の万博」に始まり、2000 年の「淡路花博」、2004 年の「浜名湖花博」でランドスケープコンサルタントとして参画してきました。現在も、２０２７年国際園芸博覧会に多くの会員が携わっています。しかし、これまで一度も「出展者」として国際園芸博覧会に参加したことはありませんでした。



国際園芸博覧会とは

国際園芸博覧会に日本で最も精通している一人である賀来宏和氏は、この博覧会のことを、「多様な園芸・農業・環境などの従事者や活動者が日頃の成果を披露する総合大会であり、本来の事業趣旨は大会に向けてこれまでの事業や活動を総括するとともに、来場者はもちろんのこと、広く国民全般に現在抱える課題や未来への展望を発信し、大会後その理念や運動を広く普及させ、時代思想を築いていくことです。」と述べています。言い換えると、国際園芸博覧会は「出展者が主役」となる国際的なイベントです。2027 年の国際園芸博覧会では、私たち CLA もその主役の一員として参加することになりました。

ランドスケープコンサルタントの花・緑出展とは 「場」を選ぶランドスケーププランニング

CLA は、62 年にわたり都市の中で公園をはじめとする緑の空間の計画・設計に携わり、近年ではその運営にも取り組んできました。しかしながら、市民のみなさまには、私たちの仕事や専門性が十分に理解されていないのが現状です。今回の国際園芸博覧会の入場者目標は 1,500 万人とされています。これは、私たちの職能や役割を多くの方々に知っていただく、またとない機会です。

「花・緑出展」の屋外出展は庭園の作品展示が主となります。これは私たちが扱うランドスケープとは少し異なる空間です。通常の出展庭園区画では「庭園」の展示はできても私たちの領域である「ランドスケープの展示」は難しいと感じていました。



また、国際園芸博の出展庭園はコンテストの対象となるため、他の出展と差別化された独自性が求められます。その結果、まわりの空間との連続性や一体性よりも、単体としての完成度を重視した提案になりがちです。これは、周辺環境との関係性を丁寧に読み解きながら空間を構築するランドスケープデザインの方向性とは、しばしば相容れないものになります。CLA がこれまで国際園芸博覧会や全国都市緑化フェアに一度も出展してこなかった理由も、まさにこの点にあったと私は考えています。

しかし今回は、私たちが望むランドスケープアーキテクトとしての「花・緑出展」のあり方について、博覧会協会の皆さまと率直に議論することができました。出展場所も協働して検討し、ランドスケーププランニングの初期段階から“共創”が実現したと強く感じています。その結果、Kids Village 内のケヤキの大木がある空間を、出展エリアとして認めていただくことができました。



ここは、大きく成長したケヤキが主役となる空間であり、私たちの考えるランドスケープ展示を最も適切に実現できる場所です。

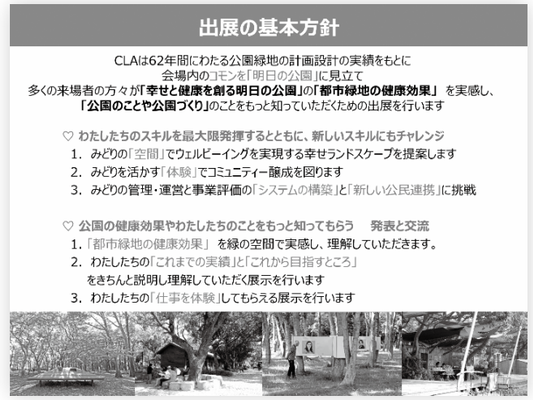
「場」を活かすランドスケープデザイン 木洩れ日に着目

私たちは、この緑の空間を活かした出展にあたり、「木洩れ日」という現象に着目しました。日本人にとって木洩れ日は、単に緑と太陽がつくり出す光の効果を示す言葉ではなく、穏やかで心地よい緑の情景を思い描き、ゆったりと流れる時間、風や音、ほのかな香りまでも共有できる、日本独特の感性を宿した言葉です。

木洩れ日は、自然を眺める対象としての緑や庭園の構成だけでなく、「緑の中に没入する体験」を示す概念でもあります。人が歩き、立ち止まり、語らい、休むといった日常の行為の中に緑を取り込み、身体的にも心理的にも自然とつながるあり方を示しています。そしてこの感性は、日本独自の美意識であると同時に、健康、歩行、滞在、暑熱対策といった現代都市が抱える課題を解決するための重要な視点にもつながっています。

これからの 「公園づくり」の「ゲームチェンジャー」 となる出展へ 「CLA こもれびラボ」コンセプト

私たち CLA は、この出展空間を明日の公園の実験空間「CLA こもれびラボ」として位置づけました。
来場者の皆さまが未来の都市緑地がもつ健康効果を体感し、理解していただけるよう、ウェルビーイングを実現するみどりの空間デザインと、緑を活用した体験プログラムを展開します。



都市公園の総数の約 9 割、総面積の約 3 割を占めるのは、近隣住民が日常的に利用する「住区基幹公園」です。商業的立地条件の良い小規模都市公園では、パーク PFI を活用した再開発が成功している事例も見られますが、それ以外の多くの公園では、自治体が維持管理に苦労しているのが現実です。

こうした小規模都市公園が持つウェルビーイング効果を最大化するためには、市民に公園の価値や必要性を理解してもらうことが不可欠です。都市が抱える課題の解決には「みどりへの投資」が効果的であり、特に身近な都市緑地のあり方こそが、多くの社会的課題を解く鍵であることを広く共有していく必要があります。

さらに、都市課題である小規模公園の再整備に向けて、新しい公民連携モデルを探る取り組みも進めます。市民は自治体を動かし、企業をも動かします。パーク PFI における企業参画も、飲食やショップの出店だけでなく、公園づくりや運営そのものを支える「企業の地域貢献」として、新たな形の参画が期待できるのではないでしょうか。

今回の出展では、こうした視点を踏まえ、これからの公園づくり、再整備の“ゲームチェンジャー”となることを目指しています。

パートナーと創るランドスケープ

街づくりは、さまざまな人々との共創によって豊かになります。私たちの考えに賛同し、協力してくださった多くのパートナーの存在がこのプロジェクト支えています。ランドスケープコンサルタントは、多様な専門家とのコラボレーションを得意としています。それは、私た

ちが「地」を読み解き、環境そのものをデザインする独自のスキルを持っているからです。「図」のデザインを得意とする領域は多くありますが、「地」のデザインはランドスケープの専門性が最も発揮される領域です。

私たちの考えに賛同し、協力していただいたパートナー

公園からの健康づくりネット（P&H）

P&Hさんは、都市公園を活用し、健康づくりに取り組むための事業を行う法人で都市緑地（公園）とウェルビーイングについてさまざまな研究、提言をされている団体です。2023年にはWHOのまとめたUrban green spaces and healthの翻訳、ガイドブック作成を通じてみどりが人にもたらす便益を日本に紹介してこられました。

また、P&Hさんは2024年より、都市における人と緑との接触を「時間」として捉える新たな指標、CGSET（Cumulative Green Space Exposure Time：緑地曝露累積時間）の研究を進められています。これは都市にどれだけ緑があるかという量的評価だけではなく、人がどこに住み、どこで働き、どの経路を歩き、どこで立ち止まるのか、その日常の行動の中に、どれほど緑が現れているかを時間軸で捉えようとするものです。今回のプロジェクトでは、このCGSETの開発を活用した出展を行い、都市の課題解決に向けた新たな提案を行うパートナーとして連携しました。



神奈川県立吉田島高等学校

神奈川県立吉田島高等学校は、明治41年の創立以来118年間、地域林業とともに教育活動を続けてきた数少ない学校です。南足柄市矢倉沢には、主伐期を迎えた30haの演習林を保有しており、森林を実際に管理しながら学ぶことのできる貴重な環境が整っています。地域林業への強い思いと将来ビジョンを持つ石塚洋平先生と生徒たちのグループは、今回のプロジェクトで、この演習林の樹木（CLAとほぼ同じ年齢）を切り出し、「こもれびラボ」の施設づくりを私たちと共創します。

吉田島高校との出会いは、森林と都市の森（公園樹木）が抱える課題を、互いの知見を結びつけることで解決できる可能性を示してくれました。国際園芸博覧会の開催地である瀬谷は、都市と森林のはざまに位置しており、都市公園と森林の創造的連携モデルを提案する場として、まさに最適なロケーションです。



東海大学建築都市学部

東海大学建築都市学部との連携は、建築とランドスケープが切り離せない関係であることを改めて示すものです。学部長である岩崎克也教授のもとで学ぶ建築家の卵たちとの共創は、双方に新たな刺激をもたらし、創造性を大きく広げてくれるはずです。

彼らが学ぶ東海大学のキャンパスには、圧倒的な存在感を放つケヤキ並木があり、その素晴らしさを日々のキャンパスライフの中で体感しています。こうした豊かな緑の経験を持つ学生たちとのコラボレーションから生まれるランドスケープには、大きな可能性が期待できます。



株式会社STORY　大学研究者が連携して設立したジョイントベンチャー企業

（株）STORYは、多くの人々が暮らすエリアの地形を詳細に計測し、そこに潜むハザードを可視化・診断することを専門とする会社です。今回はその視点を少し広げていただき、計画地にあるケヤキ群の形状を正確に把握するため、ドローンを用いた点群測量にチャレンジしてもらいました。



ケヤキを「見える化」し、定量的に把握することは、これまで経験的・直感的に行われてきた既存樹木を活用したランドスケープデザインに、新たな可能性をもたらします。私たちが目指す「太陽と緑がデザインするナチュラルな空間」を、イメージではなく、科学的根拠をもってきちんとデザインするための強力なツールとなるはずです。

松本秋則　サウンドアーティスト

サウンドアーティストの松本秋則さんは、竹を素材とした独自のサウンドアートで知られる作家です。木洩れ日空間は、光の情景であると同時に、風のざわめきや葉擦れの音、鳥のさえずりが心地よく響く、いわばヒーリング音楽に包まれた空間でもあります。物理的な光そのものには音はありませんが、静けさを象徴するメタファーとして語られるように、「音」は木洩れ日の体験と切り離せない要素です。

そこで今回は、この木洩れ日空間における「音」のウェルビーイング効果を最大化するため、松本さんに参画をお願いしました。竹を使ったサウンドアートと木洩れ日空間が響き合うことで、どのような癒しのランドスケープが生まれるのか、その新しい表現に大いに期待しています。



「幸せを創る明日の風景」

GREEN×EXPO 2027のテーマScenery of the Future for Happinessを現実の都市空間として実装できるのは、私たち造園産業です。都市のウェルビーイング向上、気候変動への適応、コミュニティの再生、公共空間の質の向上など、社会が直面する課題に対し、みどりを“機能”としてデザインし、都市に組み込む専門性を持つのは造園のプロフェッショナルだけです。

今回の出展は、造園産業の価値を社会に明確に示す大きな契機となります。これをきっかけに、

- 自治体や企業からの信頼性が高まり、プロジェクト参画の機会が増える
- 業界全体の経営基盤が安定し、持続可能な事業モデルが確立される
- 若い世代が「造園を志望する」流れが生まれ、人材が循環する産業になる
- 都市政策において造園の専門性が不可欠な領域として位置づけられる
- みどりへの投資が社会的合意として広がり、都市の質が根本から向上する

といった未来を具体的に描くことができます。

私たち自身が「幸せをつくるランドスケープコンサルタント」としての役割を自覚し、都市の課題に対してみどりの力を科学的・創造的に提示していくことこそが、このテーマを実現する第一歩です。造園産業が社会の幸福を支える基盤産業として評価される未来を、今回の出展を契機に実現へと前進させます。

（株式会社ヘッズ東京本社　代表取締役）

GREEN×EXPO 2027 CLA 出展「木洩れ日プロジェクト」
――ランドスケープの社会的役割を再定義する実証空間として――

手塚一雅
CLA ２０２７年国際園芸博覧会特別委員会委員

はじめに：木洩れ日から始まるランドスケープ

2027年3月19日から9月26日まで開催される国際園芸博覧会「GREEN×EXPO 2027」は、単なる園芸展示の場ではなく、グリーンインフラ、ネイチャーポジティブ、脱炭素、循環型経済など、これからの社会と環境のあり方を考える場である。

一般社団法人ランドスケープコンサルタンツ協会（CLA）は、キッズ・ビレッジ内の約550㎡の敷地において「花・緑出展」を行う。本稿で紹介する「木洩れ日プロジェクト」は、ケヤキの大径木群が生み出す木洩れ日を核とし、ランドスケープ専門職能が担うべき社会的役割を、空間・運営・体験を一体的に作用させて提示する試みである。


木洩れ日をつくるケヤキ（現地調査）

ランドスケープは、空間をつくる技術であると同時に、時間を扱う技術でもある。今回の出展では、既存樹木、地形、植栽、木材、光、風、そして人の行動を相互に関係づけながら、時間とともに変化する風景のあり方を検討している。

なお、本プロジェクトでは、既存のケヤキによる木洩れ日の環境から、「循環」「共生」「文化的体験」の三つの視点で考えをはじめた。これらは、運営プログラムの中で展開される要素であると同時に、空間構成とも整合させる必要がある。

「循環」は、地域材の活用や再利用を通じて、森林・加工・施工・利用へと連なる資源の流れを空間設計に取り込む視点である。

「共生」は、ケヤキの大径木群が生み出す光・風・地形といった既存環境を読み取り、人の居場所をその環境の延長として構成する視点である。

「文化的体験」は、読む・語らう・佇む・遊ぶといった行為の積み重ねが風景や文化を形成することを踏まえ、木洩れ日の下で生まれる体験を空間の価値として位置づける視点である。

これら三つの視点を統合することで、資源の循環に支えられた環境を読み解き、その環境の中で生まれる人の営みを風景として育むという、ランドスケープの専門性を総合的に示すことを目指している。

1. 若手技術者がつくる CLA の出展

本プロジェクトのもう一つの特徴は、設計そのものだけではなく、「誰が、どのようにつくるのか」というプロセスを重視したことである。

CLAでは「２０２７年国際園芸博覧会特別委員会」を発足し、各支部から計画案を持ち寄って検討を進めた。現在のプロジェクトは、関東支部の「LANDSCAPE LAB（木洩れ日プロジェクト）」を原案としている。

2026年5月以降は、特別委員会内にワーキンググループを設置し、関東支部のメンバーを中心に、各支部から若手技術者が参加する体制へと発展した。

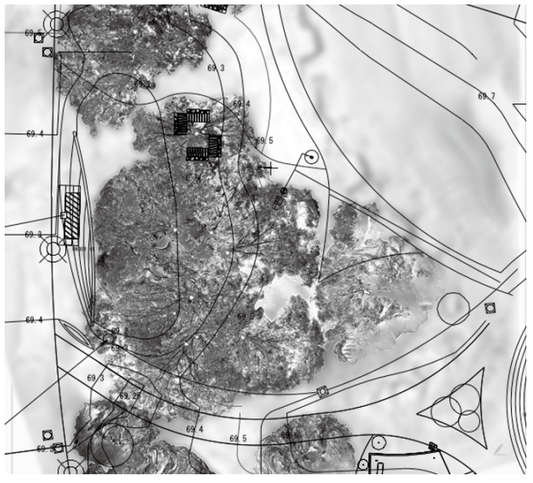
ここで意識したのは、「CLAとして一つの作品をつくる」だけではなく、「CLAの次の世代が、プロジェクトを通じてランドスケープを考える場をつくる」ということである。

複数の支部から技術者が参加することで、それぞれの地域での実務経験や専門領域を共有しながら計画を進めることが可能となった。また、若手技術者が計画検討の段階から参加することで、出展を通じた技術・知見の共有という側面も生まれている。

2.「環境を読み解く」から空間デザインへ

計画地にはケヤキの大径木群が存在する。現地調査では、「何をつくるか」から考えるのではなく、まず「この場所には何があるのか」を読み解くことから始めた。太陽の位置、樹冠の広がり、枝葉の揺らぎ、風、季節、地形といった諸条件が重なり合い、その時々の光と影を生み出している。そして、その木洩れ日の下に人が身を置くことで、自然と人との間に新たな関係性が立ち上がる。現地調査では、ドローンを用いた空中測量を実施した。取得した点群データをもとに、ケヤキの樹冠の広がりや地形の微細な起伏を把握した。また、点群データから月日・時間帯ごとのケヤキの影の変化を可視化することで環境特性を解析し、時間帯ごとの利用行動を予測するなど、空間デザインの科学的根拠として活用した。

「木洩れ日プロジェクト」は、この既存環境を起点として、人が自然を感じながら過ごすことのできる空間を創出する試みである。重要なのは、木洩れ日そのものを「デザインする」のではなく、木洩れ日が生まれる環境を読み取り、その変化を受け止める空間をデザインすることである。すなわち、設計対象を「もの」だけでなく、「環境」「人の行動」、さらに「時間」へと拡張していく姿勢そのものである。


点群データによる解析（樹木を下から上を見る）

3. 東海大学との協働―「共同思考の場」としての WS

本プロジェクトでは、東海大学大学院工学研究科・岩崎研究室と協働し、ワークショップ（以下、WS）を実施した。

建築を学ぶ学生とランドスケープの実務者が同じ場所を見て同じ現象を考えることで、異なる専門領域の視点が持ち込まれる。

WSは単なる意見交換ではなく、ランドスケープ専門職能を再定義するための「共同思考の場」として位置づけた。ランドスケープがつくる「環境」と建築がつくる「空間」を掛け合わせることで、この場所に新しい風景と価値を創出する。そのために、空間の質、自然を活かした環境性能、人の行動、景観・文化価値、デジタル技術を活用した設計プロセスについて議論した。

2026年6月から8月にかけて、計3回のWSを開催した。各回のテーマと目的を設定し、前回の検討結果を次回の設計検討へつなげる形で進めた。

【第１回 WS　木洩れ日の「現象」を読み解く】

はじめのWSでは、コンセプトの共有と、空間構成の方向性を検討することを目的とした。

まず、CLAが実施した点群データによる測量結果を可視化した3Dモデルをもとに、計画地の地形、既存樹木、周辺環境について情報を共有した。その上で、木洩れ日を構成する環境条件について意見交換を行い、以下の三つの方向性を共有した。

- 木洩れ日が生み出す「緑と太陽」「光と影」の仕組みを理解し、可視化するデザイン
- 木洩れ日に変化を与える「時間」「季節」を活かすデザイン
- 木洩れ日にゆらぎを与える「風」を可視化するデザイン

これらは、木洩れ日を固定された景観として扱うのではなく、時間や気象条件によって変化する環境現象として捉えるための基本的な視点となった。


ワークショップの様子

【第２回 WS　木洩れ日を「行動」として設計する】

２回目の WS では、空間デザインの検討を継続し、施設配置計画を具体化するとともに、施設・ファニチャーのデザイン検討へ展開することを目的とした。

CLA から平面計画案を提示し、東海大学からは、ケヤキによる日陰の移り変わりを平面計画に活かす提案が示された。

日陰の位置や範囲が時間帯によって変化することを踏まえ、施設を固定的に配置するのではなく、木陰の移動と人の行動を関連づけて考えることとした。

空間構成については、ケヤキの樹冠を「天井」、デッキを「床」と見立てる考え方を示した。その結果、デッキの外周部と植栽地との境界を明確に区切るのではなく、両者が連続するような構成とすることで、樹冠の広がりと地表面の植栽が一体的に感じられる空間を検討した。

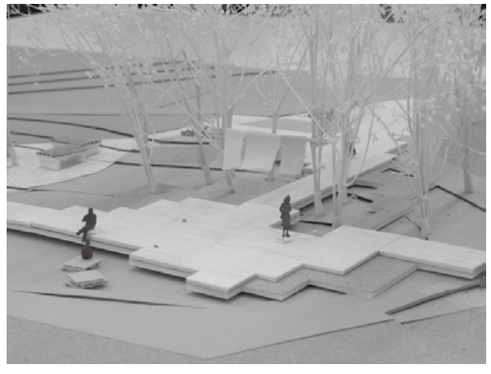
具体的には、デッキ上に映る光と影を木材の濃淡によって表現すること、樹幹の間を吹き抜ける風をインスタレーションによって可視化することを空間デザインの中心において進めた。

【第３回 WS　木洩れ日空間の統合設計】

最後の WS では、それまでの検討内容を空間全体へ統合することを目的とした。

CLA からは鳥瞰図や 3D モデル、東海大学からは模型を持ち寄り、異なる表現手法によって空間構成を確認した。

具体的な検討項目として、デッキのモジュール、端部の処理、植栽地との接続、風を可視化するインスタレーション、木材の端材を活用した舗装に関するデザインを検討した。特に、デッキを単独の施設として扱うのではなく、既存樹木、植栽、地形、光、風と一体となった環境として捉えることを確認した。



木洩れ日PJの模型
（東海大学製作）

WS を通じて、建築を学ぶ学生からの空間的なアイデアと、ランドスケープの実務者が持つ設計・施工・維持管理に関する経験を組み合わせることで、木洩れ日を体験する具体的な空間構成の検討を進めることができた。

また、東海大学とは、開催期間中にも WS を実施するなど、出展後も協働作業を行う方向で調整している。

4. 施設設計―木洩れ日を環境条件として扱う

WS を含む検討を通して、本プロジェクトでは木洩れ日を「造形」ではなく「環境条件」として扱うことを設計の基本とした。木洩れ日は、光環境、温熱環境、心理的環境、行動誘発など、複数の要素によって構成される。光環境では、樹冠を透過する光、地面やデッキへの反射光、時間によって変化する陰影などがある。

温熱環境では、樹冠による放射熱の遮蔽や、樹木周辺の風の流れが関係する。

心理的には、樹木に囲まれることによる包まれ感や安心感、樹幹の間から周囲を見渡せる視線の抜けなどが関係する。こうした環境が、立ち止まる、座る、語らう、遊ぶといった人の行動につながる。そのため、デッキについては、単に滞在施設として配置するのではなく、木洩れ日と人の行動をつなぐ空間として計画している。

現況地形の起伏を活かし、視線の抜けを確保するとともに、午前・午後の双方で日陰を利用できるよう、東西方向の広がりを持たせた。

また、利用者が自由に使い方を見つけられるよう、用途を限定しすぎない余白を設けている。

5. 地域材の活用――吉田島高校演習林の木材

本プロジェクトでは、デッキなどの木材に南足柄市の吉田島高校演習林の木材を活用することとした。



吉田島高校演習林のヒノキ（使用する木材）

使用する木材は約 60 年前に植林されたものであり、長期間にわたって育成された森林資源を、博覧会の空間づくりに活用することとなる。この 60 年は CLA の歴史とも重なっている。

木材の利用にあたっては、必要な部材量を先に設定して木材を調達するのではなく、一本の木からどの程度の部材が取れるかを算定し、その結果から必要な伐採本数を検討する方法をとった。また、端材についても、舗装材などへの活用を検討している。

これにより、木材の有効利用と空間設計を一体的に実施し、あわせて森林資源を考えることにつなげた。

素材の選択を設計の一工程として終わらせるのではなく、森林、地域、加工、施工、利用までの資源の流れを含めて考えることが、循環型社会におけるランドスケープ設計の一つの方法であると考えている。

6. 季節性・文化性・在来性を重視した植栽設計

植栽設計では、「季節の移ろい」「文化的親和性」「在来性」を重視し、上瀬谷の地にふさわしい植生をもとに、里山における野の花の風景を、ランドスケープの視点から再現する。

現況の植物相を調査し、開催期間中の草刈りや選択的除草により管理した自然の植生を基本とする。季節ごとに種類や背丈の異なる草花が展開することで、開催期間中にも植栽景観が変化する計画としている。

ケヤキの西側では、雨庭付近の花の景観との調和を図りながら、園路から見える植物の空間を創出する。

一方、東側は半自然草地として農の景観を取り込み、周辺環境と連続する植栽空間を形成する。

ここでも、植栽を完成時の状態だけで評価するのではなく、季節や成長、維持管理によって変化するものとして計画している。

7. 木洩れ日から始まる未来社会のデザイン

「木洩れ日プロジェクト」は、約 550㎡の敷地を対象とした小規模な出展である。一方で、検討の過程では、ランドスケープが扱うさまざまなテーマを具体的に検証する。

既存樹木を活かした環境形成。

地域材の活用と資源循環。

季節によって変化する植栽。

自然環境と人の行動との関係。

建築とランドスケープの協働。

デジタル技術や模型を活用した設計検討。

これらを一つの敷地の中で関連づけて考えることで、ランドスケープの専門性が扱う対象の広がりを改めて確認することができる。

従来、ランドスケープの設計では、空間構成、植栽計画、景観形成、公園整備など、それぞれの技術を個別に扱う場面も多かった。

これからは、それらを相互に関連づけながら、地域の環境や社会の課題に対応していくことが求められる。

空間設計を地域戦略へ。

植栽計画を生態系設計へ。

景観形成を幸福・健康のデザインへ。

公園整備を地域経営へ。

維持管理をランドスケープ・マネジメントへ。

こうした展開は、専門性の拡張とともに、蓄積された技術を社会の多様な場面で活用することにつながる。

本プロジェクトでは、その一端を木洩れ日という身近な環境現象を通じて検討している。

おわりに　木洩れ日とは、

まだプロジェクトの終わりには遠いが、現時点で自分なりに考えていることがある。

木洩れ日は、同じ状態にとどまらない。太陽の位置によって光の入り方が変わり、季節によって樹冠の状態が変化し、風によって枝葉が揺れる。それに伴って、地面に映る光と影も変化する。本プロジェクトでは、この変化を前提として空間を計画している。デッキ、植栽、木材、風を可視化する仕掛けなど、それぞれの要素が単独で成立するのではなく、既存のケヤキがつくる環境の中で相互に関係することで、来場者がその時々の木洩れ日を体験できる場所を目指している。

また、今回の出展では、CLA 会員所属の若手技術者によるワーキンググループや、東海大学との WS など、複数の主体が計画・設計に参加している。計画地の環境を読み、議論し、模型や 3D モデルを用いて確認し、さらに設計へ反映する。そのプロセスそのものが、本プロジェクトにおける一つの成果である。

GREEN×EXPO 2027 における CLA の出展が、来場者に木洩れ日の心地よさを体験してもらう場となるだけでなく、ランドスケープが環境と人の関係をどのように扱うことができるのかを考える機会となればと考えている。

木洩れ日という小さな現象を手がかりに、自然、空間、人の行動、地域資源、そして時間との関係を読み解く。その積み重ねが、これからのランドスケープの設計と専門職能を考える一つの手がかりになることを期待している。

（株式会社 CES. 緑研究所代表取締役／
株式会社森緑地設計事務所）

永続する森林経営から紡ぐ、ウェルビーイングな空間デザイン

石塚洋平
神奈川県立吉田島高等学校 演習林担当教諭

1．矢倉沢演習林の森林経営が目指すもの

神奈川県立吉田島高等学校は、明治 40 年に足柄郡立農業補習学校として開校し、明治 42 年に演習林を設置して以来、117 年間にわたり継続した林業教育と森林経営を行ってきた。本校は神奈川県で唯一の林業教育を実践し、矢倉沢演習林（約 30ha）と実習用宿泊施設「黒ヶ畑寮」を擁する高校である。

森林・林業教育は、農業科である「都市農業科」「食品加工科」「環境緑地科」、家庭科の「生活科学科」に所属する生徒たちが、3 年間かけて実施する「演習林環境教育」の中で取り組み、より専門的な学びを深めるため選択科目として「森林科学」「森林経営」「林産物利用」を設置している。

演習林環境教育において最も重要としているのは、実践的な森林経営を通し、「長期の視座」を身につけさせる点にある。林業の循環は長く、植林から下草刈り、枝打ち、間伐と育成していき、最終的な収穫である皆伐を 50 年以上の年月をかけて目指す。演習林では 60 ～ 100 年生のスギ・ヒノキを育成しており、歴代の生徒、教職員が心血を注いで育成をしてきた。


生徒による寮建設地拵え


演習林管理作業


黒ヶ畑寮

本校の卒業生に神奈川県を代表する林業経営者である杉山精一氏がいる。私たちの演習林のある南足柄の育成型林業は、約 120 年前に杉山家を含む数件の篤農家と吉田島高等学校（当時：郡立農業補習学校）から始まった。先日、120 年生のスギの伐採に生徒と共に立ち会い、伐採木の年輪を調査すると、113 年前に直径 5㎝で丁寧な枝打ちが実施されていた。杉山氏の祖父の仕事を見させていただき、「長期の視座」の意味を真に理解することができた。113 年前の仕事は、その時の自らの懐を豊かにするわけではない。「長期の視座」とは、自身は見ることのできぬ、孫や子孫、一族、地域の為の今日の仕事であり、本校の校訓である二宮尊徳の遺訓「至誠勤労」につながる。

このように、現在の日本中の森林は先人たちの汗と努力の積み重ねによって成立しており、森林としての価値の最大化を目指した永続的な森林経営を目指していかなければならないが、実際の森林経営は現実的には難しい局面にある。


113年前の枝打ち痕


伐採木


杉山氏から学ぶ歴史

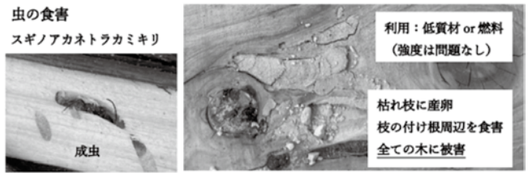
2．地域森林の課題

神奈川県西部の森林は、スギノアカネトラカミキリによる被害が蔓延している。スギノアカネトラカミキリは枯れ枝から侵入し、樹木の形成層周囲を食害し、製材後の製品の品質を落とす。

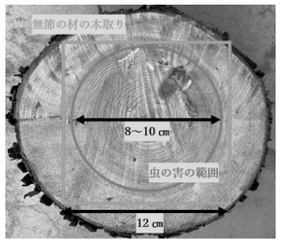
拡大造林期に植林された日本の多くの人工林は最終的な収穫本数（1,000 本 /ha）の 3 倍程度の過密な状態で植林し、間引きを繰り返しながら直径成長をコントロールし、枝打ちに取り組み、無節な優良材を目指した。しかし、急激に拡大した人工林は枝打ちまで手が回らず、実施が遅れたり見送られたりした。結果的に枝は枯れ枝となり、スギノアカネトラカミキリの食害を受け、材質が低下した林分も増えた。

十分に手の入った森林では、丸太を観察したのちに製材をすれば高品質な柱や板を生産することができる。また、スギノアカネトラカミキリの被害木であっても、構造材としての能力に問題はなく、構造材が目に触れることのない現代の大壁造りの家づくりにおいては気にする必要がない。

しかし、市場はそのような判断はせず、神奈川県西部の木材であるということだけで、B 材と呼ばれる合板用材や C 材という燃料用材へとまわされ、低質材として流通される。このような状況は森林所有者の経営意欲を削ぎ、整備遅れの森林を増加させ、火山灰が多い県西部では土砂災害を誘発している。



スギノアカネトラカミキリの被害



丸太を観察した製材

3．吉田島高校からはじまる新しい林業

本校の森林・林業教育は「team 吉田島」として地域・業界が一丸となって未来の林業の担い手を育成する体制を構築している。各教科では地域課題を解決し、永続的な森林経営を目指す「新しい林業」について「team 吉田島」と連携した授業内のプロジェクト学習を通して実践している。

プロジェクト学習では、課題設定、計画立案、実施、反省と評価のプロセスについて主体性を持って取り組み、知識・技術の習得と同時に、解決を目指した思考と判断の繰り返しによって、社会実践力のある高度な技術者の育成を目指す。特に今年度は、地域に先行して 59 年ぶりとなる皆伐と再造林を実施する。

4．「森林科学」で実践する伝統的林業の復活と吉田島式造林法の試行

「森林科学」では、再造林において 10,000 本 /ha の超密植で枝打ちと多間伐に取り組む伝統的な林業技術を実践し、尾鷲地域などを参考にした小径木からの出荷を目指す。その際、植林時から森林三次元計測システム（OWL）を活用して森林管理状況のトレーサビリティをとると同時に、成長過程の精密な記録を行い、地域林業に普及していくためのデータを取得していく。製材時に必ず無節の優良材が生産できることが担保された材は新たな付加価値になると考えられる。

また、日本全体における林業の課題として、林齢の偏りと再造林率の低下があげられる。戦後の造林時期が偏っていたため長期間の育成を経て収穫期を迎えているが、現状の売却価格ではこれまでの投資金額を回収できないことから、再造林率は 3 ～ 4 割にとどまっている。現状の資源を使い尽くすと将来の資源は不足し、植林をしたとしても再び 50 年を超える育林期間では木材の不足期間が生じる。これらのことから、収穫までの育林コストを削減し、短期間で育成できる林業技術が必要となる。

本校では、教育連携の協定を締結する物林株式会社の実践する早生樹を活用した低コスト再造林プロジェクトからインスパイアされ、早生樹と薬木の混植を「吉田島式造林法」と名付けて実践する。早生樹は構造材として活用する 30 年伐期のコウヨウザン、薬木は樹皮（漢方）と葉（お茶・製薬原料）を利用するトチュウとした。施業の低コスト化と中間収益によって林業の黒字化を目指す。

トチュウは 10 年伐期で樹皮を収穫し、その後は萌芽更新を活用して葉を収穫する。コウヨウザンも針葉樹としては珍しく萌芽更新が可能である。コウヨウザンとトチュウを 1：1 の割合で植林し、トチュウは中間収益を

得ながら10年伐期で収穫することから、コウヨウザンの生育空間には余裕が生まれ、枯れ枝は発生せず、スギノアカネトラカミキリの被害も最小限に抑えられると考えられる。材は並材生産を目標とし、無間伐で枝打ちも実施せずに収穫を迎える。初期生育の早さから下刈り作業も最小限に抑えられると考えられる。


枝打ち実習の様子


トチュウ試験林(愛川町)


コウヨウザン大苗(生育2年目)

5.「林産物利用」で挑む皆伐生産丸太の価値最大化

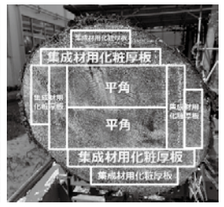
南足柄の木材利用にはスギノアカネトラカミキリの被害によって3つの課題があり、構造材としての機能は十分にあるのに利用されないこと、管理された森林では良質な材が生産可能なのに評価されないこと、被害の食痕を材の個性として捉え自然美として受け止めて利用する価値観の欠如がある。構造材としての機能評価は県森林組合連合会や県森林保全課を中心に利用普及が進められているため、本校では後者の二つを中心に課題解決に取り組み、皆伐によって生産される丸太の価値の最大化を目指す。

昨年、演習林より95年生のヒノキの丸太（末口径46cm前後、材長4m、5本）を搬出した。市場では4,000円/tであり、1本当たり約4,000円の評価となる。枝打ちされた丸太であっても南足柄産であることや、大径材は利用用途が限定され市場価格が低いことからくる。そこで授業では大径材の価値を最大化する製材と利用について取り組むこととした。

昨年度は無節の厚板や梁・土台を生産し、伝統建築を手掛ける杢巧舎（神奈川県湯河原町）へ評価について相談し、厚板では200,000円/㎥の価格を設定し、実際に販売までおこなった。厚板は住宅の階段と造作洗面台に利用され、材としての価値を最大限に発揮することができた。

また食痕については「WormHoleArt」として欠点から個性へと捉え直し、壁材などに自然美として食痕を見せる加工に取り組んでいる。昨年は非営利株式会社BUNDが運営する地域活動拠点「SHIRO」の玄関壁材として出荷した。試験施工と合わせ、多くの方の目に触れることで自然美としての新たな視点を地域の方々に持ってもらいたいと考えた。


大径材の製材



製材の木取り


階段板へ活用


造作洗面台へ活用


壁材のさね加工


左:食痕の壁　右:説明ポスター


食痕の状況

6. 実践的な「森林経営」で山から利用を提案

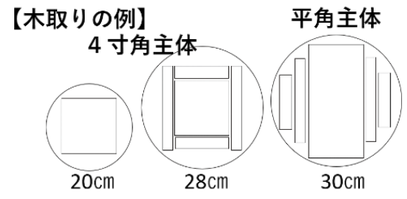
59年ぶりの皆伐再造林にあたり、授業では4月より森林の状況を調査し、評価額を算出、実際の入札までを取り組んだ。現在、皆伐を実施しており、搬出された材は国際園芸博覧会へ活用するために出材されている。

木材の流通には、三次元森林計測システム（OWL）で測定した点群データを活用している。機器を活用することで立木の形状を含めた森林の状態を把握でき、丸太の生産量まで算出することができる。授業では、丸太の生産量と「林産物利用」で求めた価値を高める製材の木取りを合わせて考え、どのような製品がどれくらい生産できるのか把握している。このデータを利用すると、山を調査した段階で川下へどれだけの製品量が供給できるか、価格も併せて交渉することができる。

AIの進化は目まぐるしく、近い将来、森林調査と同時に生産される製品をデータ上で把握でき、実際の建築まで山側から提案できる未来があると考えられ、森林の価値を最大化する建築利用が実現する。私たちは今回のCLAの皆様との取り組みの中で、将来訪れることを願う森林に寄せた人の営みと木材の利活用について国際園芸博覧会を通して表現したいと考えている。


OWLによるデータの測定


取得した点群データ



製材木取りの例

7. ウェルビーイングな空間デザインとCLA出展への期待

私は、ウェルビーイングな空間デザインにおいて、その空間を構成する材料がどのようなストーリーの中で生み出されたものなのか感じとり、利活用の中で材料の持つ魅力をどこまで引き出すことができるのかが重要となり、木材であればこの営みが森林の価値を最大化し、持続可能な社会と永続的な森林経営につながっていくと考えている。

CLAの皆さんには伐採前から演習林や南足柄の林業の歴史に触れていただき、製材や利活用についてもディスカッションをさせていただいた。皆様が手掛ける今回の空間デザインを通し、来場者が森林とそこから生産される木材を捉え直し、永続する森林というウェルビーイングの根底となり得る存在に思いを馳せるスタートになることを願っている。

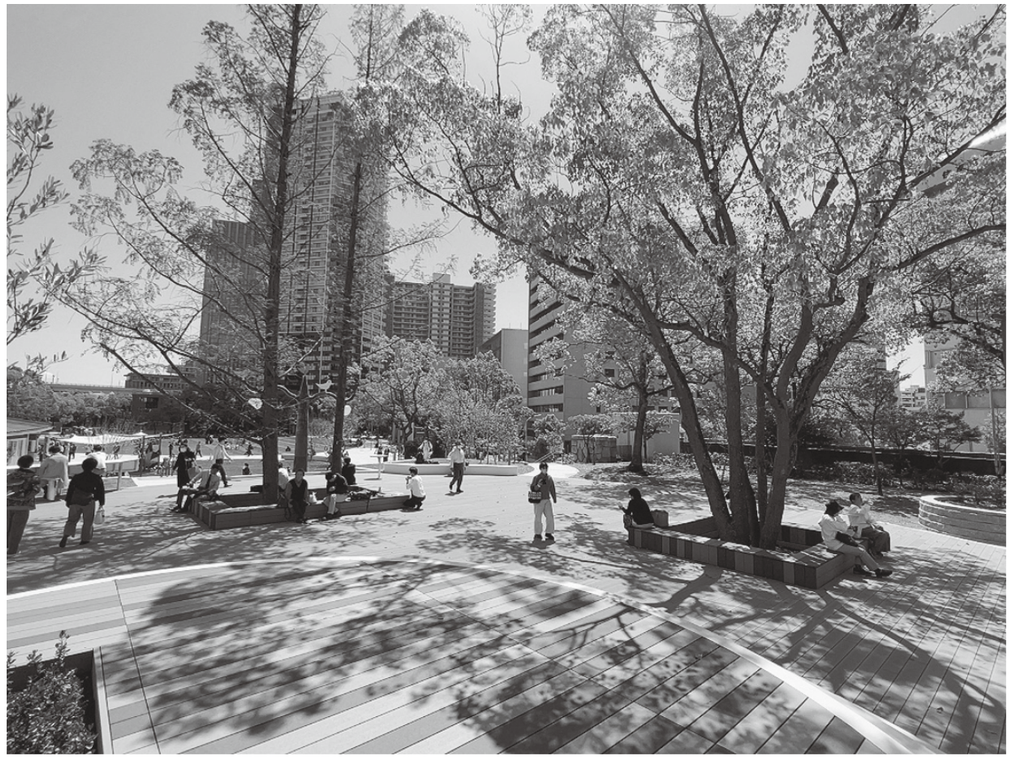

評価額を算出する生徒


杉山氏と立木を確認するCLAの皆さん


皆伐の集材状況

造園は、人の時間をつくる仕事である
―CGSETがひらく職能の言語とGREEN×EXPO 2027―

小野 隆
一般社団法人公園からの健康づくりネット業務執行理事
CLA ２０２７年国際園芸博覧会特別委員会委員 国際委員会委員長



東遊園地（写真提供：小林和子）

造園の仕事は、本来、木陰に人を立ち止まらせ、歩く速度を変え、腰を下ろす場所をつくり、季節の移ろいを感じる時間を都市の中に組み込むものである。

樹木の位置、園路の曲線、ベンチの向き、植栽の高さ、視線の抜け。その一つひとつを、人がそこでどのように動き、どのように過ごすかという想像から決めてきた造園家がいる。彼らの仕事は、空間を整えることにとどまらず、そこで生まれる人の行動や時間までを描こうとするものだった。

もちろん、すべての造園の仕事が、そのように進められてきたわけではない。公共事業の中で、造園は数量や仕様によって発注され、限られた条件のもとで確実に施工することを求められてきた。樹木を指定された本数だけ配置し、園路や施設を図面どおりに納めることも、仕事を成立させるうえで欠かすことのできない役割である。

その一方で、数量の背後にある目的を読み取り、木陰や滞在、動線や眺めへと置き換える思考は、明確な言葉にならなくても、樹木を一本置く位置を迷い、園路をわずかに曲げ、ベンチの向きを変える仕事の中に表れる。そこには、そこで過ごす人の姿を思い描いてきた造園の記憶が、今も残っている。

発注者と受注者の双方に、みどりや空間に対する共通の理解があった時代には、その一つひとつを言葉にして説明する必要は、さほどなかったのかもしれない。与条件を示せば、その先にどのような場所をつくるべきかが、ある程度共有されていた。

むしろ、それを逐一言葉にすることは、少し無粋でさえあったのだろう。造園の価値は、語るよりも、つくられ、使われ、感じられるものだった。

しかし今、都市のみどりには、健康、気候変動、生物多様性、移動、地域経済など、これまで以上に多様な期待が寄せられている。これらの分野もまた、造園が何を考え、何を実現できるのかに耳を傾け始めている。

これまで造園の内部で暗黙に扱われてきたことにも、説明が求められるようになった。その問いに応え、他分野と共に事業を組み立てるためには、私たちが数量や図面の背後で扱ってきた価値を、共有できる言葉として取り出す必要がある。

数量として示され、体験として描かれてきた

公共事業において、空間は数量として発注される。樹木は本数、園路は面積、ベンチは基数として積算される。それは、事業を公平に発注し、施工し、検査するために必要な仕組みである。

しかし、数量は本来、目的そのものではない。

高木を何本植えるかは、木を植えること自体が目的だからではなく、必要な樹冠や木陰、空間のスケールを成立させるためである。ベンチを何基置くかも、施設数量を満たすためではなく、誰がどのように座り、周囲とどのような距離を取り、どれほどの時間を過ごせるかに関わっている。

かつて発注者が示すのは、必要な施設や数量、機能であることが多かった。しかし近年では、「心地よく過ごせる場所」「人が歩きたくなる環境」「健康やウェルビーイングに寄与する空間」といった、そこで生まれる体験や効果までが、事業の目的として掲げられるようになっている。

人が必ず座る、必ず交流する、必ず健康になると発注することはできない。発注できるのは、そのような行動や時間が生まれ得る環境である。

そして、この新しいオーダーに応えることができるのが、造園である。

心地よさやウェルビーイングという抽象的な期待を、樹冠、植栽、地形、動線、家具、舗装、日照、視線、管理方法へと翻訳し、さらに施工や契約が可能な数量と仕様へと置き換える。人の行動を直接つくるのではなく、その行動や時間が生まれ得る条件を、空間として整えることは、造園が培ってきた仕事である。

ただし、こうした翻訳が、常に十分に行われているとは限らない。目的が共有されないまま、数量だけが引き継がれ、配置すること自体が仕事になってしまうこともある。だからこそ今、数量の背後にある意図を、改めて確かめる必要がある。

仕様書には数量が書かれ、図面には空間が描かれる。しかし、造園が本来描こうとしてきたものは、その場所で人が過ごす時間でもあった。

人を完成予想図に描き添えるのではない。朝、昼、夜、季節の中で、異なる人々が過ごす時間に思いをはせ、さまざまな使われ方を受け止める空間を描く。その技術を、もう一度、私たちの仕事の言葉として取り戻したい。

なぜ今、言葉が必要なのか

都市のみどりが健康やウェルビーイングに関係すること自体は、もはや新しい主張ではない。身体活動を促すこと、心理的な回復を助けること、暑熱、大気汚染、騒音などの環境リスクを軽減すること、人と人との交流や地域のつながりを支えることなど、多様な効果が国内外の研究によって示されている。

WHOは、都市の緑地や水域が、身体的・精神的健康、社会的なつながり、環境リスクの軽減、地域の魅力、経済などへ連鎖的な価値をもたらすことを示している。

しかし、その価値は、緑地が存在するだけで自動的に生まれるものではない。近くにあっても入りにくい公園、日陰や座る場所のない広場、生活動線から外れた緑地、利用に不安を感じる場所では、期待される便益は十分には生まれない。緑の量だけでなく、質、配置、アクセス、安全性、管理状態、地域の社会的条件、そして人々が実際にどのように利用しているかが、その価値を左右する。

言い換えれば、他分野が求めているのは、緑によって何が可能になるのかという答えである。

人が歩きたくなること。

暑い日にも外で過ごせること。

孤立せず、また一人にもなれること。

自然と日常的に関係を結べること。

都市の中に、よりよく生きる選択肢が増えること。

これらは、造園が以前から扱ってきた事柄である。健康分野が求める身体活動や日常接触を、どのような空間

条件によって支えるのか。交通分野が求める歩行や回遊を、緑によってどのように誘発するのか。暑熱対策としての樹冠を、人の滞在や移動とどう結びつけるのか。生物多様性を、人々の日常の経験とどう接続するのか。

他分野から投げかけられる問いに、造園の知見をもって答えるための言語が必要になっている。そのために、これまで共有されてきた造園の知見を、健康、移動、気候、生物多様性などの問いに応じた言葉へ開いていく。そして、その言葉を介して、他分野と共に新しい事業を組み立てていくことである。

造園がつくってきた時間を測る

私たちは現在、都市における人と緑との接触を時間として捉える指標、CGSETの研究を進めている。

CGSETは、Cumulative Green Space Exposure Time、緑地曝露累積時間の略である。衛星データなどから把握した緑の分布と、人流データによって示される人の行動を重ね、人と植物が同じ場所に存在する確率を求め、それを時間へ換算する。

ここで重要なのは、緑を空間の量から人の経験へと読み替える視点である。

都市の緑は、どれだけあるかだけではなく、どのように出会うかによっても価値が決まる。人がどこに住み、どこで働き、どの経路を通り、どこで立ち止まるか。その日常の中に緑がどれほど現れているかを捉えようとする。

CGSETが測ろうとしているのは、人と緑が出会い、そこで過ごす時間である。それは、造園家がこれまでも空間の中につくり込んできたものである。ただ、それを改めて説明することも少なく、整備の成果として確かめる方法も限られていた。

今、その時間が健康、移動、気候、生物多様性、地域経済など、さまざまな分野から問われるようになった。CGSETは、その問いに、造園の側から答えようとする方法の一つである。これまでは、公園面積、緑被率、樹木本数、整備箇所数を測ることはできても、人々が実際にどのように緑と出会い、どのような時間を過ごし、その生活がどのように変化したかを把握することは容易ではなかった。

整備前後で緑との接触がどう変わったか。歩行や滞在がどう変わったか。どの地域や人々にその機会が生まれたか。

こうしたことを確認できるようになれば、造園の仕事は、完成した空間や施設数量だけで評価されるものではなくなる。

構想し、設計し、施工し、育て、その結果として人の時間がどう変わったかを確かめ、次の改善へつなぐことができる。

暗黙知を置き換えるのではない

CGSETは、造園家の感覚や経験に代わるものではなく、その判断が何を目指しているのかを共有し、完成後に確かめるための指標である。

木をどこに植えるか、どの枝を残すか、どこに余白を設けるか。そこには、土地を読み、植物を知り、人の行動を想像する専門的な判断がある。CGSETは、造園家が生み出そうとする時間を、発注者や他分野と共有できる形にする。必要なのは、どのような時間を生み出したいのかを発注者と受注者が共有し、その実現方法を造園家の職能に委ねることである。数量や仕様は、その仕事を成立させる条件として置かれる。

そして完成後には、想定した時間が本当に生まれたのかを確認する。

測ることによって、職能が何を実現しようとしているのかを明確にし、その価値を事業の途中で失わないようにするのである。

コスト縮減や設計変更が生じたときも、数量だけが目的であれば、樹木やベンチを減らすことが単純な合理化に見える。

しかし、それが木陰、滞在、歩行、交流など、どのような人の時間を生み出すために必要なのかが共有されていれば、設計意図を守りながら別の方法を考えることができる。

言語化と測定は、造園家が手の中で守ってきた価値を、他分野との協働の中でも守り、広げるためにある。

造園の仕事の広がり

人と緑との接触を時間として捉えると、造園の仕事の広がりも見えてくる。計画では、緑をどこに配置するかだけでなく、人の日常動線のどこで緑と出会わせるかを考える。

設計では、美しい空間を描くだけでなく、歩く、座る、休む、遊ぶ、集まるといった行動が生まれる条件を組み立てる。

施工では、設計意図を形にするだけでなく、樹冠、土壌、植栽密度、舗装、家具などが、人の利用を支える性能を実現する。

管理では、完成時の姿を保存するのではなく、樹木の成長や使われ方に応じて、木陰、視認性、滞在性、歩行環境を調整し、人の時間を育てる。

評価では、整備量だけでなく、実際にどのような行動や時間が生まれたかを確認し、次の計画や管理へ戻す。

これは、造園が別の職業へ変わることではない。造園が本来担ってきた仕事を、より広い政策や事業の中で発揮できるようになることである。

健康施策における身体活動や日常接触。交通施策における歩行や回遊。暑熱対策における樹冠と屋外滞在。企業経営における就業環境や地域価値。不動産開発における滞在やエリアの魅力。生物多様性施策における自然との日常的な関係。

造園は、それらを個別の機能として付加するのではない。

人と植物が出会い、そこで人が自らの生活を営むことのできる環境をつくる。その結果として、健康、社会、環境、経済の価値が生まれる。

GREEN×EXPO 2027で示すもの

2027年に横浜で開催されるGREEN×EXPO 2027は、造園が何をつくる仕事であるのかを、社会に向かって示す機会となる。

そこに展示されるのは、優れた園芸技術や美しい植栽だけではない。

木洩れ日の下で本を読む人がいる。

家族が昼食をとっている。

少し休むつもりで座った人が、予定より長く留まっている。

その姿を見た別の人が、自分もそこで過ごしたいと思う。

植物や緑が人の行動を変え、都市の中に新しい時間を生み出す。そのこと自体が展示となる。

今回の出展で私たちは、造園がこれまで何をつくってきたのかを、実物の空間と、そこで過ごす人々の姿によって示すのである。

CGSETは、誰が、どこで、どのように緑と出会い、どれほどの時間を過ごすのか。その問いを、計画、設計、施工、管理、評価のすべてに通すための言語である。

造園は、人の時間をつくる仕事である。私たちは、そのことを以前から知っていた。発注者もまた、造園が数量だけを納める仕事ではないことを知っていた。双方の理解のもとで、言葉にしすぎなくても、良好な空間はつくられてきた。

今、他分野から都市のみどりに新たな期待が寄せられ、造園の答えに耳を傾ける人々が増えている。私たちは、これまで培ってきた知見を、他分野の問いに応え、共に事業を組み立てるための言語へ開いていく必要がある。

私たちは、人と緑が出会い、そこで新しい行動や関係が始まる時間を、これまでもつくってきた。そのことを示そうではないか。

（株式会社公園マネジメント研究所　相談役）

参考文献

WHO欧州地域事務局による都市緑地と健康に関する主な報告書

2016 Urban green spaces and health

2016 Urban Green Spaces and Health: Intervention Impacts and Effectiveness

2017 Urban green spaces: a brief for action

2017 Urban Green Space Interventions and Health: A review of impacts and effectiveness

2021 Green and Blue Spaces and Mental Health

2023 Assessing the value of urban green and blue spaces for health and well-being

企画特集

2

公園の再整備へと繋げる“創造的管理”

公園の再整備へと繋げる“創造的管理”とは

丸山英幸　髙橋和嗣
公園植栽地の創造的管理推進特別委員会ワーキングチーム

1．はじめに

令和３年にCLA本部内に設置された「公園樹木長寿命化技術研究特別委員会」※のワーキングチームでは、植栽地の創造的管理の推進に向けた検討を積み重ねてきました。令和５年には国営昭和記念公園事務所のご協力を得て、同公園花木園でウォークスルー手法による管理の実証実験を行うなど、約４年余にわたり取り組んできました。

このほど成果として『公園植栽地の創造的管理計画策定の手引き（案）』がまとまり、さる令和８年５月27日のCLA令和８年度定時総会後の説明会において公表され、７月16日にはCLA会員各社にデータとして配布されたところです。

本稿はこの『手引き（案）』に記載した公園植栽地の創造的管理の検討のプロセスを示すと共に、その前提となった実証実験に関して解説致します。

2．公園植栽地の創造的管理とは

ここでいう「植栽地の創造的管理」とは、従来の樹木等の健全性の維持と利用者の安全・安心の確保を基本とする「維持管理」に加え、植栽地を地域の価値創出や住みよい生活環境づくりにつながる資源として積極的に活用する、創造性を備えた「能動的管理」をいいます。

植栽地の創造的管理は、以下のような基本的視点に基づいて進められます。

①植栽地を単位とする管理を基本とし、そのもとで樹木の管理をおこなう。
②多角的な調査・診断をおこなって、対象地の特性・問題点・課題を的確に把握する。
③多様なステークホルダーの声を活かす。
④創造的管理の推進に向けて、その基本となる計画及び設計を策定する。
⑤ＰＤＣＡサイクルによる植栽地の継続的・順応的管理を常態化する。
⑥管理コストの最適化を図る。

3．創造的管理を必要とする背景

(1) 公園を量産した時代の植栽設計基準

今から40年程前は、国民１人当りの公園面積を欧米並みに引き上げる目標が掲げられていました。つまり公園を量産することが求められ時代です。そのため、緑化に関する基準が整備されてゆきます。代表的なものとして工場立地法の緑化基準で、10㎡当たり高木１本以上を植栽するという植栽密度基準がありました。おそらく公園を新設する際に、この基準が適用されたものと考えられます。

この植栽密度基準をもって半完成型の植栽設計で公園の外周部を施工すると、樹高4.0～5.0ｍの高木を３ｍ内外の間隔で植栽することになり、図-1のようなイメージになります。一応、公園の外周部植栽として形になります。

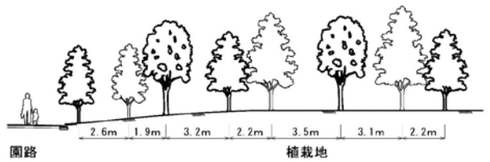


図-1　当時の植栽基準での竣工当時のイメージ

なります。

(2) 40年ほど経過した公園の植栽地

当時の緑化基準による植栽地が40年ほど経つと、様々の弊害が発生します。植栽地の過密化による樹勢の衰え、それに伴う倒木、落枝の危険性、見通しが悪くなるための防犯上の問題、さらには荒廃感が高まり景観上の問題が発生します。これらが現在の公園植栽を取り巻く代表的な課題といえるでしょう。（図-2）

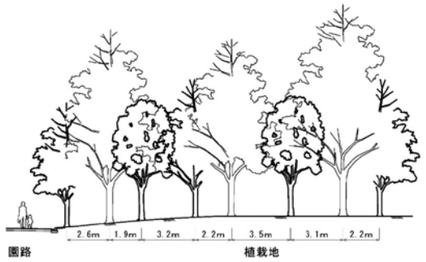


図-2　植栽後40年経過のイメージ

(3) あるべき姿に戻し更なる価値の向上

公園植栽の課題を解決するために、生育状況の良い樹木や植栽地の価値を高める樹木を残し、衰弱木や障害木の除伐、間伐をおこないます。弊害となる要因が無くなり、かつ植栽密度が適正になることによって植栽地が健全になります。その結果、全体的な植栽地の景観が、あるべき姿を取り戻してゆきます。

また、眺望や通景を回復する場合も考えられ、更なる価値の向上が図れます。例えば港湾景観が臨める公園があったとして、上記のような創造的管理をすることにより、港湾への眺望を取り戻すようになります。更に視点場となる近景の低木、地被、舗石を整えることにより景観を際立てます。（図-3）

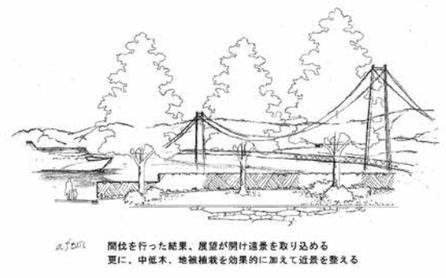


図-3　植栽地創造的管理後のイメージ

それだったら、最初から将来を見越した植栽間隔にしたら良いのではという指摘がありそうです。そのような植栽間隔で、半完成型植栽をおこなった場合は図-4のようになり、植栽地としての機能が発揮できません。

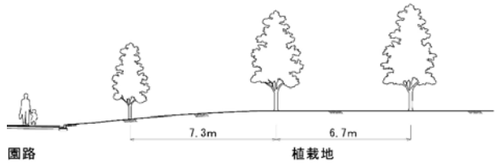


図-4　当初から40年後の間隔で植栽したイメージ

(4) 過去の「植栽地の創造的管理」

昔から「植栽地の更新計画」と「庭園の模様替」という造園技術の概念はありました。これらは「植栽地の創造的管理」と共通する造園技術で、小形研三先生は造園修景大事典（同朋舎出版）で、以下のように記述されています。

「樹木は絶えず生長している。その生長量は、樹種、周囲の環境要因などによっても差が出てくる。樹木の生長を抑制し、植栽の美しいバランスを長く維持するため、通常整姿剪定や刈込みなどの手入れが行われるが、―中略―過密になったり、良いバランスを崩した場合など、植栽地の一部を模様替することがある。

この模様替は必ずしも当初の推定ミスによるのではなく生長に伴う必然的な管理作業の一部とも考えられる。」以上が植栽地の創造的管理の考え方ですが、マニュアルを作るにはモデルとなる事例に乏しく、実証実験的に方法論を構築してゆく必要がありました。

4．国営昭和記念公園における実証実験

実証実験のフィールドとしては幸いにも国営昭和記念公園事務所ご協力が得られ、2023年に同公園の中央部東側に位置する「水鳥の池」の東北側に広がる「花木園（約8.5ha）の内の『早春花木園、他』約8,000㎡でウォークスルーによる創造的管理の実証実験を行うことができました。

(1) ウォークスルーとは

ウォークスルーとは協働型・現地立会重視型の管理手法の総称です。立場を超えた関係者が現場で一堂に会し、課題の抽出と共有、改善の手法や優先度等を合意形成し、測地的な調整を積み重ねる管理手法です。対象は都市公園を中心とする様々なオープンスペース及び自然公園等の園地・樹林空間も含みます。また、植栽や植物管理に限定したものではなく、園路・広場、四阿、ベンチ、サインなど植栽・植物に付帯する造園施設も含む総合的な

景観形成と造園空間管理を目的としています。

昭和記念公園での実証実験では以下の項目を重視して、特に高木・中低木等の植栽管理に焦点をあて「ウォークスルー」を実施しました。

- 関係者一同による、現況課題、改善手法の共有
- 現地参加・確認を重視した現場主義
- 当初の設計思想の重視・尊重とその限界点の抽出
- 従前管理手法の尊重とその限界点の抽出
- 管理技術・手法の工事業者との現地共有
- 管理工事に関する設計図書（図面、数量、概算、報告書）の作成

なお、今回の関係者は以下の通りです。

- 公園管理者：国営昭和記念公園事務所
- 運営維持管理業務受託者：国営昭和記念公園管理センター
- 工事業者：管理工事受託業者
- コンサルタント：ＣＬＡ公園樹木長寿命化技術研究特別委員会ワーキングチーム

（2）実証実験対象地（花木園）の概況



図-5　1980年計画段階のイメージ「武蔵の雑木林」

国営昭和記念公園は1983年に部分開園し2023年に40周年を迎えております。1980年に設計された花木園の計画では「さわやかな武蔵野の雑木林」のイメージとされ、自然風群植を基調植栽とした豊かな四季の変化の演出や、水面への見開き・各所からの通景（ビスタ）など景観的演出、遮蔽や動線誘導などの機能面も意識され、図－5のようなスケッチも残っています。

しかし、40年を経た現状は鬱蒼とした樹林であり、高木は全般的に大径木化し、常緑樹は林冠を圧迫し林床は暗く、落葉樹も鬱閉し樹林の通気性・日照を妨げ、散見されるナラ枯れの遠因と考えられます。また、林床の地被類は日照不足から概ね衰退・消滅し、演出性や多様性が失われています。低木は経年的に切詰剪定され肥大化し、園路幅員を圧迫しているとともに、水鳥の池への通景を大きく阻害しています。これらの結果、当初設計の「武蔵野の（さわやかな）雑木林」のイメージから離反している現状です。（図－6参照）



図-6　2023年ウォークスルー時の花木園

5．創造的植栽管理工事の設計と施工の実際

こうした現況課題に対し、準備会を含め計４回のウォークスルーを通じて関係者と協議しつつ、景観面では池への通景の確保や見通しの良い林床景観を再生すること、機能面では主園路から四阿等の施設への誘導、岬への誘い等の機能更新、生態面では樹林間にギャップを生成し雑木林の若返りや林床の活性化を狙う、という基本方針を取りまとめ、個々の植栽に対する管理作業内容を定めて、植栽の管理工事を実施しました。また、作業の実施に際しても、ＣＬＡの立会の元、現地での詳細な確認・修正・技術指導等を行い、きめ細かく工事を実施することができました。

これらの結果から、ウォークスルー手法の特徴とメリットは以下のようにまとめられます。

●立場の異なる関係者が一堂に会し、情報を共有し、フラットに議論することができる。

- 参加者の課題意識が高まる
- 植物管理の問題・課題に対して立場を超えた相互理解が深まる
- 参加者の情報・知識・スキルの共有が深まる
- 施工業者の技術が向上する

●現場での立会を重視することで、測地的な調整を積み重ねることができる。

- 現場感覚に即し多面的な議論ができる
- 制約の中でも植栽の質を向上させる様々なアイデアが生まれる。
- 状況の変化に応じて柔軟に対応する順応的管理が可能となる。

6．施工前と施工後の比較

特に大きく効果の発現した部分を以下に示します。

●四阿周辺の状況

施工前：コナラ林が大径木化し鬱閉、林床は暗く不健康な状況。また、一部にナラ枯れも散見された。池への通景が疎外され、設計当初の空間イメージと離反。



図－7　四阿周辺の施工前の状況

施工後：ナラ枯れ木を除伐し密度を約1/2に低減、ギャップダイナミクスによる雑木林の若返りを狙う（今後後継木の植足し更新へ）。肥大化した刈込ツツジ類を大幅に移植。池への見通しを回復し明るい林床に変化。利用者増加が実現した。



図-8　四阿周辺の施工後の状況

●密生したモミジ林

施工前：イロハモミジの懐部分の幹・枝先が密生状態で、絡み枝等が散見された。ドウダンツツジ等の低木も過繁茂し、岬地形でありながら池への通景を疎外していた。



図-9　モミジ林の施工前の状況

施工後：高木剪定と低木の移植を実施。池への通景・岬らしい景観が回復し、園路の視認性も向上。幹抜き・枝抜き剪定により自然樹形へと誘導。懐の幹・枝の通気性を確保し健全化へ誘導。幹を見せる修景性が向上した。



図-10　モミジ林の施工後の状況

7．おわりに

全国で頻発している樹木の倒木、落枝への対処は喫緊の課題であると共に、公園樹木のストック効果を発揮し、風格ある都市づくりやWell－being、地球温暖化の防止、生物多様性保全等により一層貢献できるように50年100年先のレガシーづくりを見据えて、しっかりと取り組むべき課題でもあります。本稿及び「公園植栽地の創造的管理計画策定の手引き（案）」がその一助になれば幸いです。

（丸山英幸　株式会社愛植物設計事務所）
（髙橋和嗣　株式会社URリンケージ）

※同委員会の検討内容を、「公園植栽地の創造的管理推進特別委員会」が引き継いでいる。

一般社団法人ランドスケープコンサルタンツ協会 会員名簿

正会員 82

◎：会長 ○：副会長 ◇：理事 □：監事

会員名	電話番号		協会代表者	〒	所在地	FAX番号
㈱アーバンデザインコンサルタント	03-3353-1016		宮地奈保子	160-0004	新宿区四谷 4-30-14　服部ビル	03-3353-1018
㈱アーバンデザインコンサルタント	092-282-1788	○	大杉哲哉	812-0029	福岡市博多区古門戸町 7-3　古門戸中埜ビル	092-282-1777
㈱愛植物設計事務所	03-3291-3380		趙　賢一	101-0064	千代田区神田猿楽町 2-4-11　犬塚ビル	03-3291-3381
㈱あい造園設計事務所	03-3325-6660	◇	鈴木　綾	168-0063	杉並区和泉 3-46-9　ＹＳ第一ビル	03-3325-6262
㈱荒木造園設計	0727-61-8874		荒木美眞	563-0024	池田市鉢塚 2-10-11	0727-62-8234
㈱荒谷建設コンサルタント	082-292-5481		西手恭一	730-0833	広島市中区江波本町 4-22	082-294-3575
㈱エイト日本技術開発	03-5341-5151		村山克也	164-8601	中野区中野 2-24-11　住友不動産中野駅前ビル	03-5385-8505
㈱エコル	03-5791-2901		大島　渡	106-0047	港区南麻布 3-20-1　Daiwa 麻布テラス 4 階	03-5791-2902
㈱エス・イー・エヌ環境計画室	06-6373-4117		津田主税	530-0014	大阪市北区鶴野町 4-11-1106	06-6373-4617
㈱エスティ環境設計研究所	092-271-3606		澁江章子	812-0028	福岡市博多区須崎町 12-8	092-271-3662
㈱エプリプラン	0852-55-2100		青木　晋	690-0816	松江市北稜町 46-6	0852-55-2101
㈱オオバ	03-5931-5812		北村史高	101-0054	千代田区神田錦町 3-7-1　興和一橋ビル	03-5931-5817
㈱環境・グリーンエンジニア	03-5209-3691		小林哲央	101-0041	千代田区神田須田町 2-6-5　ＯＳ '85 ビル	03-5209-3696
環境設計㈱	06-6261-2144		井上　健	541-0056	大阪市中央区久太郎町 1-4-2	06-6261-2146
㈱環境デザイン研究所	03-5575-7171		佐藤文昭	106-0032	港区六本木 5-12-22　永坂ビル	03-5562-9928
㈱環境緑地研究所	011-221-4101		太田幸司	060-0005	札幌市中央区北 5 条西 6 丁目 1-23　第二北海道通信ビル	011-221-4237
㈱環境緑地設計研究所	078-392-1701		八木　啓	650-0024	神戸市中央区海岸通 2-2-3　サンエービル	078-392-1576
㈱神田設計	052-522-3121		吉川明宏	451-0062	名古屋市西区花の木 1-3-5	052-522-3000
㈱環ヴィトーム	097-534-1436		松本克哉	870-0046	大分市荷揚町 10-13	097-537-8578
キタイ設計㈱	0748-46-4902		梶　雅弘	521-1398	近江八幡市安土町上豊浦 1030	0748-46-5620
㈱空間創研	075-823-6331	◇	宇戸睦雄	600-8392	京都市下京区綾小路通堀川西入妙満寺町 580 番地 1	075-823-6332
㈱グラック	03-3249-3010		北川明介	103-0004	中央区東日本橋 3-6-17　山一織物ビル	03-5645-7685
㈱クロス・ポイント	045-777-2027		堀川朗彦	223-0062	横浜市港北区日吉本町 2-44-40-209 号	045-514-8529
㈱KRC	026-285-7670		宮入賢一郎	381-2217	長野市稲里町中央 3-33-23	026-254-7301
景域計画㈱	045-263-9504		八色宏昌	231-0005	横浜市中区本町 1-5-2-2D	045-263-9505
㈱景観プランニング	028-615-7500		栁田千恵子	320-0026	宇都宮市馬場通り 3-2-9　ﾏｽｷﾝｱﾈｯｸｽﾋﾞﾙ	028-615-7513
㈱建設環境研究所	03-3988-1818		川鍋範廣	170-0013	豊島区東池袋 2-23-2	03-3988-2018
㈱現代ランドスケープ	06-6203-1270	◇	西辻俊明	541-0046	大阪市中央区平野町 3-1-10-603	06-6203-1271
㈱公園マネジメント研究所	06-6947-6522	◇	小野　隆	540-0012	大阪市中央区谷町 2-2-22　ＮＳビル	06-6947-6523
サンコーコンサルタント㈱	03-3683-7152		串田宗史	136-8522	江東区亀戸 1-8-9	03-3683-7116
㈱CES．緑研究所	045-315-2524	◇	手塚一雅	231-0014	横浜市中区常盤町 2-10　常盤不動産ビル	045-315-2518
シビックアーツコンサルタント㈱	092-555-4151		書川真一	815-0032	福岡市南区塩原 4-5-29	092-555-5693
㈱シビテック	011-816-3001		吉川明徳	003-0002	札幌市白石区東札幌 2 条 5-8-1	011-816-2561
㈱シン技術コンサル	011-859-2604		内藤佳樹	003-0021	札幌市白石区栄通 2-8-30	011-859-2614
㈱スペースビジョン研究所	06-6942-6569		安場浩一郎	540-6591	大阪市中央区大手前 1-7-31　ＯＭＭビル	06-6942-6897
㈱セット設計事務所	042-324-0724		池田与志雄	185-0012	国分寺市本町 2-16-4	042-324-3468
㈱ZEN環境設計	092-643-5500		中村久二	812-0053	福岡市東区箱崎 1-32-40	092-643-5520
㈱爽環境計画	03-3829-4691		木村　隆	130-0013	墨田区錦糸 3-7-11　メゾン・ド・ファミール	03-3829-4692
㈱総合計画機構	06-6942-1877		濱口和雄	540-0012	大阪市中央区谷町 2-2-22　ＮＳビル	06-6942-2447
㈱総合設計研究所	03-3263-5954	□	石井ちはる	102-0072	千代田区飯田橋 4-9-4　飯田橋ビル 1 号館	03-3263-7996
第一復建㈱	092-412-2230		箱嶋　斉	812-0006	福岡市博多区上牟田 1-17-9	092-412-2240

会員名	電話番号		協会代表者	〒	所在地	FAX番号
ダイシン設計㈱	011-222-2325		追山公宏	060-0001	札幌市中央区北 1 条西 1-6　さっぽろ創世スクエア	011-222-9103
大日コンサルタント㈱	058-271-2659		岩田裕憲	500-8384	岐阜市薮田南 3-1-21	058-276-6418
大日本ダイヤコンサルタント㈱	03-5298-2051		田口勝則	101-0022	千代田区神田練塀町 300 番地　住友不動産秋葉原駅前ビル	03-5295-2130
高野ランドスケーププランニング㈱	011-738-5661	◎	金清典広	064-0953	札幌市中央区宮の森三条 5-6-19	011-738-5662
㈱地域計画建築研究所	06-6205-3600		水谷省三	541-0042	大阪市中央区今橋 3-1-7　日本生命今橋ビル	06-6205-3601
㈱地球号	06-6945-7566		中見　哲	540-0031	大阪市中央区北浜東 6-6　アクアタワー	06-6945-7595
中央コンサルタンツ㈱	052-971-2541		三浦利夫	460-0002	名古屋市中区丸の内 3-22-1	052-971-2540
㈱塚原緑地研究所	043-306-8446	◇	塚原道夫	261-0004	千葉市美浜区高洲 3-11-3　第２並木ビル	043-306-8447
㈱辻本智子環境デザイン研究所	0799-72-0216		辻本智子	656-2401	淡路市岩屋 3000-176	0799-72-0217
㈱ドーコン	011-801-1535		藤井康生	004-8585	札幌市厚別区厚別中央 1 条 5-4-1	011-801-1536
㈱東京ランドスケープ研究所	03-6859-1088		小林　新	151-0071	渋谷区本町 1-4-3　エバーグレイス本町	03-6859-1087
㈱都市技術設計コンサルタント	096-389-8453		西田公一	861-8045	熊本市東区小山 2-23-69	096-389-8506
㈱都市計画研究所	03-3262-6341		石川　純	103-0014	中央区日本橋蛎殻町 2-13-5 美濃友ビル	03-3669-8924
㈱都市整備コンサルタント	011-643-6951		大沼俊道	060-0001	札幌市中央区北 1 条西 19-1-4	011-612-7583
㈱都市ランドスケープ	03-5269-8982		嶋村　仁	162-0065	新宿区住吉町 5-7 曙橋ハイム鍋倉	03-6384-1814
㈱トロピカル・グリーン設計	098-832-3169		喜屋武　忍	902-0072	那覇市字真地 388 番地 6	098-832-6374
㈱中根庭園研究所	075-465-2373		中根史郎	616-8013	京都市右京区谷口唐田ノ内町 1-6	075-465-2374
㈱虹設計事務所	03-3419-7259		光益尚登	154-0001	世田谷区池尻 3-3-1　キドビル	03-3419-7246
ＮｉＸ JAPAN㈱	076-464-6520		西田　宏	930-0857	富山市奥田新町 1 番 23 号	076-464-6671
日本工営都市空間㈱	052-979-9111	◇	則竹登志恵	461-0005	名古屋市東区東桜 2-17-14　新栄町ビル	052-979-9112
㈱ニュージェック	06-6374-4032		堀内康介	531-0074	大阪市北区本庄東 2-3-20	06-6374-5147
パシフィックコンサルタンツ㈱	03-6777-4433		松延　穣	101-8462	千代田区神田錦町 3-22　テラススクエア	03-3296-0530
早川都市計画㈱	0565-85-0381		石川　武	471-0868	豊田市神田町 1-5-7	0565-85-0382
㈱復建技術コンサルタント	022-262-1234		仲村明信	980-0012	仙台市青葉区錦町 1-7-25	022-265-9309
復建調査設計㈱	082-506-1853		藤田健一	732-0052	広島市東区光町 2-10-11	082-506-1890
㈲プラネット・コンサルティングネットワーク	03-3652-5508		岡島桂一郎	132-0025	江戸川区松江 7-21-19	03-3652-5506
㈱プレック研究所	03-5226-1101		杉尾大地	102-0083	千代田区麹町 3-7-6　麹町 PREC ビル	03-5226-1112
㈱文化環境設計研究所	03-6321-8062		落合直文	165-0026	中野区新井 1-12-6 Ｂ 102	03-6321-8062
㈱ヘッズ	06-6373-9369		田中　康	530-0022	大阪市北区浪花町 12-24	06-6373-9370
北海道造園設計㈱	011-758-2261	◇	佐藤俊義	060-0807	札幌市北区北 7 条西 2-6　山京ビル	011-709-5341
㈱ポリテック・エイディディ	03-6222-8912		吉田　博	104-0041	中央区新富 1-18-8　RBM 築地スクエア	03-5541-3510
㈱三菱地所設計	03-3287-5750		植田直樹	100-0005	千代田区丸の内 2-5-1 丸の内二丁目ビル	03-3287-3230
㈱緑設計	0188-62-4263	◇	板垣清美	010-0973	秋田市八橋本町 4-10-26	0188-62-4273
㈱緑の風景計画	03-3422-9511	○	板垣久美子	154-0012	世田谷区駒沢 2-6-16	03-3422-9530
㈱森緑地設計事務所	03-5484-6070		藤内誠一	108-0014	港区芝 5-26-30　専売ビル	03-5484-1550
㈱ＵＲリンケージ	03-6803-6200		髙橋和嗣	135-0016	江東区東陽 2-4-24　サスセンター	03-6803-6222
㈱ライフ計画事務所	03-5626-4741	○	金子隆行	136-0071	江東区亀戸 6-58-12	03-5626-4740
㈱ランズ計画研究所	045-322-0581	□	満生朋子	220-0004	横浜市西区北幸 2-10-36	045-322-0719
㈱ランドプランニング	047-710-6120	◇	萩野一彦	271-0092	松戸市松戸 1230-1 ピアザビル 9 階	047-710-6220
㈱リアライズ造園設計事務所	06-6941-1151		田中幸一	540-0026	大阪市中央区内本町 1-1-6-401	06-6941-1154
㈱緑景	06-6718-6880		上田純也	543-0001	大阪市天王寺区上本町 6-9-14　上本町ビル	06-6718-6850

賛助会員　47

会員名	電話番号	協会代表者	〒	所在地	FAX番号
アゴラ造園㈱	03-3997-2108	荻野淳司	179-0075	練馬区高松 6-2-18	03-3997-2252
イー・トップ㈱	03-6261-4484	峯　公一郎	102-0074	千代田区九段南 3-3-6	03-6261-4485
㈱石勝エクステリア	03-3709-5591	川崎鉄平	158-0094	世田谷区玉川 2-2-1	03-3709-5857
石黒体育施設㈱	052-757-4030	石黒和重	464-0848	名古屋市千種区春岡 2-27-18	052-763-8110
㈱ウォーターデザイン	03-3431-8070	荒川展幸	105-0014	港区芝 3-3-12　芝松下ビル	03-3431-8116
内田工業㈱	052-352-1811	内田裕郎	454-0825	名古屋市中川区好本町 3-67	052-351-1326
Ｈ．Ｏ．Ｃ㈱	0956-48-8101	鏑流馬清規	858-0907	佐世保市棚方町 221-2	0956-48-8111
㈱ＳＤＡＴ	06-6605-1166	仲　則幸	545-0014	大阪市阿倍野区西田辺町 1-1-1	06-6606-4033
㈱岡部	0764-41-4651	奥村慎一郎	930-0026	富山市八人町 6-2	0764-31-6340
快工房㈱	048-291-7721	石井裕士	333-0816	川口市差間 2-14-5	048-291-7725
㈱環境産業	0228-25-3416	佐藤貴浩	989-5611	栗原市志波姫南郷外沼 66 番地	0288-23-6142
小岩金網㈱	03-5828-8828	一戸典夫	111-0035	台東区西浅草 3-20-14　JNT ビル	03-5828-7693
コサカ建材㈱	052-433-5821	菱田淳仁	453-0837	名古屋市中村区二瀬町 53 番地	052-433-5847
㈱コトブキ	03-5733-6691	小林大祐	105-0013	港区浜松町 1-14-5　Ｄ．Ｉ．センター	03-5733-6672
㈱ザイエンス	03-3284-0501	津野瀬浩司	101-0035	千代田区神田紺屋町 17　ONEST 神田スクエア	03-3284-0504
㈱サカヱ	0422-47-5981	栗田耕司	181-0004	三鷹市新川 4-7-19	0422-49-2122
㈱サトミ産業	0258-87-5500	佐藤　勉	940-0871	長岡市北陽 2-14-23	0258-87-5501
㈱三英　景観事業部	04-7153-1511	棚田信幸	270-0119	流山市おおたかの森北 1-8-6	04-7153-3627
篠田㈱	058-245-5183	高田一行	501-6004	羽島郡岐南町野中 1-8	058-240-2661
スイコー㈱	06-6412-5855	矢島由浩	660-0857	尼崎市西向島町 86 番地	06-6414-2284
西武造園㈱	03-4531-3600	本郷壮一	171-0051	豊島区長崎 5-1-34　東長崎西武ビル	03-4531-3610
積水樹脂㈱	06-6365-3204	井川忠興	460-0003	大阪市北区西天満 2-4-4	
大嘉産業㈱　産業資材事業部	03-6716-0885	肥田浩明	140-0001	品川区北品川 2-32-2　六行会総合ビル	03-6716-0826
太陽工業㈱　東日本営業２部	03-3714-3461	中島康友	154-0001	世田谷区池尻 2-33-16	03-3791-7731
大和リース㈱	06-6942-8011	野田夏夫	541-0011	大阪市中央区北浜 4-1-1　淀屋橋ゲートタワー 25F	06-6942-8135
タカオ㈱	0849-55-1275	高尾典秀	720-0004	福山市御幸町中津原 1787-1	0849-55-2481
ＴＳＰ太陽㈱	03-3719-3721	池澤嘉悟	153-0043	目黒区東山 1-17-16	03-3791-0953
テック大洋工業㈱	03-5703-1441	小俣智裕	144-0031	大田区東蒲田 2-30-17　サンユー東鎌田ビル	03-5703-1444
東亜道路工業㈱	03-3405-1813	荒木亨一	106-0032	港区六本木 7-3-7	03-3405-4210
㈱ドゥサイエンス	03-5561-9751	香取良一	106-0032	港区六本木 4-1-16　六本木ハイツ 511 号	03-5561-9726
㈱トーシンコーポレーション	03-3714-0151	塚田俊介	152-0001	目黒区中央町 2-35-13	03-3710-1191
トーヨーマテラン㈱	0568-88-7080	川崎智博	480-0303	春日井市明知町 1512	0568-88-3370
㈱中村製作所	047-330-1111	櫻田正明	271-0093	松戸市小山 510	047-330-1119
日都産業㈱	03-3334-2216	西尾幸三	168-0081	杉並区宮前 5-19-1	03-3334-6211
日本体育施設㈱	03-5337-2616	奥　裕之	164-0003	中野区東中野 3-20-10　ケイエム中野ビル	03-5337-2610
長谷川体育施設㈱	03-3422-5331	中田慎一	154-0004	世田谷区太子堂 1-4-21	03-3412-8415
花豊造園㈱	075-341-2246	勝山禎彦	600-8361	京都市下京区大宮通五条下る二丁目堀之上町 518 番地	075-361-0961
日日石材㈱	03-5637-9211	渡辺昌照	131-0033	墨田区向島 3-39-14	03-5637-9213
㈱日比谷アメニス	03-3453-2401	樋口康成	106-0047	港区南麻布 3-20-1　Daiwa 麻布テラス 4 階	03-3453-2426
㈱風憩セコロ	048-558-0077	竹田　靖	361-0026	行田市大字野字八ツ島 3341 －７	048-558-0078
㈱富士植木	03-3265-6731	成家　岳	102-0074	千代田区九段南 4-1-9	03-3265-3031
前田工繊㈱　東京本社	03-6402-3944	近藤宏之	105-0011	港区芝公園 2-4-1　芝パークビルＡ館	03-6402-3945
前田道路㈱	03-5487-0031	牧大次郎	141-8665	品川区大崎 1-11-3	03-5487-0039
㈱前山	052-841-9250	堀　浩之	467-0803	名古屋市瑞穂区中山町 4-17	052-852-0300
㈱丸山製作所	03-3637-4340	丸山智正	136-0071	江東区亀戸 7-5-1	03-3683-7553
㈱モクラボ	0790-66-3210	関根純一	671-2411	姫路市安富町三森 421-3	0790-66-3810
㈱ユニソン	052-238-1187	荒川直樹	473-0925	豊田市駒場町藤池 17 番地 1	052-238-1178

編集後記

本号では、CLA 賞受賞作品と、来年開催される GREEN×EXPO 2027 への CLA の挑戦を特集しました。CLA 賞の作品には、地域の自然や歴史を読み解き、人々の暮らしと結びながら、新たな価値を創り出すランドスケープの力が示されています。
一方、GREEN×EXPO 2027 では、CLA はこれまでの計画・設計を担う立場から一歩踏み出し、初めて「出展者」として社会に向けて私たちの職能を発信します。
「CLA こもれびラボ」は、みどりが人の健康や幸福、そして都市の未来にどのように貢献できるのかを、来場者とともに考える場でもあります。優れた仕事を顕彰し、その蓄積を次の時代へつなぐこと。そして、ランドスケープの可能性を自ら社会に問いかけること。本号が、私たちの職能を改めて見つめ、「幸せを創る明日の風景」へ踏み出す契機となれば幸いです。

CLA journal　no.187

発行日　2026 年 10 月 23 日
発行人　金清典広
編　集　(一社)ランドスケープコンサルタンツ協会
広報委員会
発行所　(一社)ランドスケープコンサルタンツ協会
〒103-0004 東京都中央区東日本橋3-3-7
近江会館ビル
TEL 03-3662-8266　FAX 03-3662-8268
https://www.cla.or.jp

※本ジャーナルの無断複製・転載・転用は固くお断りします。